
手を伸ばす、花びらを振り払って

mimicmimic

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手を伸ばす、花びらを振り払って

【Nコード】

N8191Q

【作者名】

m i m i c m i m i c

【あらすじ】

古に失われた魔法の力を蘇らせ、世界統一を目指すガストラ帝国。祖国の理想のため前線で指揮を取る女將軍は、氷を操る力と冷たいアイスブルーの瞳から、帝国の青き薔薇と呼ばれていた。長く繊細な金系の髪をなびかせて、細身に「魔法」の力を宿した美貌の軍人、セリス・シエール。彼女はたった、十七歳の少女だった。

chapter . 1

マランダ、南大陸の薔薇。

北を背の高い山脈に守られたこの国は、温暖な気候と水捌けのよい大地に恵まれていた。年中花咲き乱れ作物も豊富で、美しく整備された町並みは、国の豊かな歴史を思わせる。

艶光りする石畳の道に赤れんがの家々が立ち並び、ポーチには色鮮やかな草花が花壇からこぼれんばかりに香る。

その間を、子供たちは楽しそうに駆け回っているのだろう。寒さも暑さも知らず、飢えも、苦しみも、痛みはなにも知らずに。

マランダ。南大陸の薔薇。

お前が明日も華やいでいられるかどうか。それはわたしの手にかかっているのだ。

帝国の常勝將軍、青き薔薇と呼ばれる、このわたしの手に。

+++++

chapter . 1

戦場の花

+++++

落日が西の森へかかった。斜めに差し込む光に視界がにじむ。

いや。涙の訳は眩しさのせいだけではない。わたしはあくびを噛み締め、足を組み替えた。簡易な折り畳み椅子が軋む。

しかしいくら目をこらしてみても、マランダの町と仮設本部の間に横たわる草原にはなんの変化もない。

「まだ、戻らないのか」

たまり兼ねて、わたしは呟いた。隣に控えていた兵士はなにも答えない。じりじりと、時間だけが焦げ付くように過ぎていく。

交渉役と護衛兵三人を送り出したのは、正午より前のことだった。その目的は戦争の平和的解決。

マランダの民にとってはこの上もない好条件だ。国の名を残し、自治も認める。有事には帝国から出兵、援助も行う。その代わりに徴税の責務を負い、大陸に住むすべての民の生活に責任を持つこと。

認めなければ、征服する他ない。

マランダは間違いなく承諾するはずだった。ツェン・アルブルグを制圧したこのガストラ帝国軍に勝る軍事力を、こんな辺境国家が抱えているはずもない。

それなのに、待てど暮らせどなしのつづて。

もう何度となくのぞいた双眼鏡を、再び手に取る。その行為にはすでになんの期待もなく、ただ機械仕掛けのように半刻ごとに繰り返していた。

群青や深い緑色の屋根が並ぶ町並み。西向きの瓦一枚いちまいが、夕日を浴びてきらめいている。

その下には、今夜が昨日と同じ平和のうちに過ぎていくと信じて疑わない人々がいるのだろう。眠りが常に暖かい夢の中にあると思いい込んでいるのだろう。

だがもし、和解が成立しなければ。彼らの明日は、彼らの夜は、いともあっさり摘み取られてしまうのだ。

わたしは自分のてのひらを見下ろした。女らしい線の細さや柔らかさは消え、硬くなったまめの並ぶこの手。

マランダよ。その鮮やかな花弁をむしり取り、根をひきちぎり打ち捨てねばならないのか。

わたしのこの凍りつく手で。

いつの間にか、眉にしわを寄せていた。そう気づいたのは、ふいに耳をついたざわめきのせいだった。草原を駆けるチョコボのひづめ。

「ようやく、戻ったようすな」

顔を上げる。先程まで黙り込んでいた兵士が、わたしの剣を携え隣にやってきた。

そうだ。これだけの時間がかかったのだ。交渉は決裂したのだらう。

「ご準備を」

「分かっている」

剣を腰に差し、右手に帝国旗を握る。暮れ方の空を燃やす、紅蓮

の旗が翻る。

そこへ、ダチヨウを金の羽で飾ったような、勇敢で素早く忠実な生き物が引かれてきた。戦のため特別に調教されたチヨコボだ。その背中には、縁に繊細な銀細工の施された鞍が乗せられている。

「シエール將軍！」

チヨコボに飛び乗るわたしの足元に、一人の男が倒れ込んできた。昼前に颯爽と出立した交渉人だ。彼は震える瞳でわたしを見上げる。強張った口元は、髭が浮かんで黒ずんでいた。

「申し訳ございません！ 私の力が及ばぬばかりにこのようなことに――」

「若輩者であるわたしに代わり、お前はよくやってくれた。悪いのは、頭の硬いマランダの指導者たちだ」

わたしがそうなだめても、彼の震えは止まらない。怯えているのは自身の非力のためか、それとも。

見定めようと見つめていると、彼は一つ息を飲み、そして思い切ったように裏返った声を上げた。

「マランダは、まことに美しい町であります、將軍！ どうか、どうか……」

それともわたしの、力のせいかな。

大の男が、震えながら懇願する。わたしは一体何者だ？

ああ。

そんなことを考えるな。わたしは町娘とは違うのだ。

茂みの中で風にさんざめく花々の一つではなく。わたしが選んだのは、戦花となる道なのだから。

「美しき故に傷つけるな、と言うか」

伝令チヨコボの駆け回るざわめきが聞こえる。赤い空に巻き上がる粉塵。

戦いの気配。だがこれは、マランダ自身の望んだ結末。

「では貧しくつましい町ならば、傷つけてもいいと言っのか？」

「け、決してそのようなわけでは！」

「どの道、もう争いは避けられん。見ろ」

すでにわたしの目の前には、千五百の兵士の隊列が出来上がっている。あちこちから上がるときの声。

- - ガストラ皇帝万歳、帝国の青き薔薇万歳！

その威勢に追いやられるように、陽はずるずると森の中へ消えていく。悶えるように、嫌がるように、燃えながら。

「シエール將軍、準備整いました！」

まだ納得できないらしい交渉人の背後から、三人の上級兵がやってきた。みな甲冑に身を固め、身分を表す飾り斧を手にしている。交渉人が口を開くより先に、わたしは彼らに声をかけた。

「東と西の隊との連絡は」

「つつがなく。あとはこちらから合図を上げるだけでございます」

「將軍、どうか、どうかご英断を！」

悲鳴のような声とともに、交渉人はチョコボの手綱に飛びついた。それを見た上級兵たちは慌てて引きはがしにかかる。

「將軍の御前だぞ、何を考えとるんだ貴様！」

二人掛かりで羽交い締めにした交渉人は、それでもじつとわたしを見上げていた。彼の目に、わたしは無慈悲な鬼に見えるのだろうか。マランダの町々を焼き付くし、人々を殺戮する。そんな人間に見えるのだろうか。

いや。

誰にどう思われても、わたしは理想のために戦うだけ。

「お前は確かによくやってくれた。だがマランダのように豊かな領土こそ、我が国の目指す世界には必要なのだ」

「そのために、民を傷つけても良いというのですか！」

「見くびるな！ 我が軍は志願兵からなっている。みな同じ理想のため命を捧げる覚悟だ」

「しかし、マランダは？ マランダの軍は民兵ですぞ！」

「その民兵を負け戦に差し出したのは、マランダの王族だ！」

太陽が消え、青白く冴えていく空に急かされるように、わたしは怒鳴った。

「衛兵、こいつを連行しろ！ す巻きにしてテントに放り込め」

するとすぐに、数人の下士官が慌てて駆けてきた。そしてまだ何か喚いている交渉人を引きずって行く。

上級兵士三人はため息をついて、彼を見送った。

「まったく、とんだ野郎でしたな」

「マランダでどんな待遇を受けたか知らんが、あんな腑抜けが我が帝国の交渉人とは」

「ああ。だが気持ちは分からなくもないな」

「シエール將軍！」

とがめるような部下の口調に、わたしは小さく笑った。そして再び、北に見えるマランダを眺める。民家の窓からこぼれる灯が、夕闇に優しく浮かんでいた。

じき、そこに自衛軍の松明が並ぶだろう。いや。もうこのわずかな明かりの陰に、身を潜めているのかもしれない。

「我々は貧しい国々を救うため、富める国に協力を仰いでいるだけだ。人々を傷つけないわけでも、秩序を壊したいわけでもない。戦争など、不本意なだけだ」

しかし、生まれてくるすべての命の平等のため。わたしは引くわけにはいかないのだ。そしてそのための犠牲であればいとわない。鬼でも薔薇でも、好きに呼ぶがいい。

目を細めれば、見える。この地上に生まれたすべての人々が、生きる希望に満ちた世界。力と理想を併せ持つこのガストラ帝国になら、きつとつくることができる。

「さあ、進軍だ！」

上級兵三人がそれぞれ騎兵に合図を送ると、彼らはラッパを吹き鳴らしながら駆けていく。

草原に吹き抜ける、地鳴りのような雄叫び。土煙りが澄んだ空気に広がり、遠いマランダの町を飲み込んだ。

さあ、もう後には引けない。

わたしは唇を薄く開け、埃っぽい空気を細く、長く吸い込む。目を閉じる。左胸に、うごめく気配を感じる。

血液ではない冷たい液状の何かが、体中指の先まで満ちていく。波のように脈のように、寄せては返して、より大きな流れになっていく。

「……行こう」

自分だけに聞こえるように囁いた。同時に帝国旗を空に突き上げ、満ちてきた『力』をその腕から解き放つ。

そう。野菊の幸福を捨てて手に入れた、これがわたしの力。ガストラ帝国の誇る科学が復活させた、古に失われた『力』。

箒手の表面から、透明な三本の蔓がするすると伸びる。ひんやりと冷気を感じるのは、その正体が氷だからだ。蔓は速度を上げて夜空へ向かう。そして千五百の兵士たちの頭上で一本の茎となり、巨大な花となった。どこか切ない暮れの空の色をした薔薇。それが開戦の合図。

「ガストラ帝国、万歳！」

今度こそ将らしく勇ましい声をあげて、わたしはチョコボの横腹を打つ。昼でも夜でもない、うつすらと暗い水色を映した凍てつく人工の花は、空高く上って勢いよく砕け散った。まるで色のない花火のように。

そして再び太陽が昇る頃には、マランダ王族は大人から子供まで一人残らず討たれ、宮廷前の広場には帝国旗が掲げられた。

こうして我がガストラ帝国は、南大陸の統一を果たしたのだった。

+++++

chapter . 1

戦場の花

終わり

+++++

chapter . 2

マランダ制圧の五日後。首都ベクタへ凱旋し皇帝への謁見を済ませたわたしは、城下街の酒場へ向かうため足早に廊下を歩いていた。

空調機のタービン音が響く中、壁に掲げられたガスランプの明かりも届かないほど高いアーチ型の天井に、鋼鉄の床とブーツの底がぶつかる足音がこだまする。詰め襟の礼服のせいで、首筋に粘り気のある汗が纏わり付いていた。

共に戦った仲間に合流して、冷えた酒をあおるのが楽しみだ。しかし足を急がせるわたしを、思いもしなかった人物が呼び止める。

「もどつたんだねえ、セリス」

足元から絡み付くような声に、ぞつと背筋が泡立つ。浮ついた気分は消えうせて、わたしは慌てて振り返った。しかし細長い角柱が幾何学模様のように続く長い廊下には誰もいない。

汗ばむ背中にざわざわと広がる、嫌悪感。いや。これはきっと、わたしの最も憎む罪悪感なのかもしれない。

瞬きもできずに薄暗い廊下を凝視する。姿は見えなくとも、わたしはその声の主をよく知っていた。

落ち窪み、いつもくたびれたように垂れていた大きな目。その中で、驚くほど小さな孔雀色の瞳はいつもせわしなく動いていた。下まぶたはくまで黒ずみ、げっそりと頬骨に張り付いた皮膚に血色はない。

そして彼はいつも背中を丸めて歩き、肩越しにわたしをうかがっていた。

「パラッツォ先生……？」

+++++

chapter . 2

鬱屈の苗床

+++++

柱の一つから、色鮮やかな影が姿を現した。美しい花々の刺繍が施されたローブに、もつれた長い金髪の一房が乗っている。

やはり。わたしの魔導の先生であり皇帝直属の大魔導師でもある、ケフカ・パラッツォだ。

背の低い彼は上目遣いでわたしを一瞥した。しかしわたしと視線がぶつかれば、逃げるように目を伏せる。それからわたしの周りをそわそわと意味もなく歩き始めた。

「久しぶりだね……？ マランダ遠征を率いてたそうじゃないか。知らなかったよ……閣下から聞くまでね……」

ローブを引きずって歩きながら、パラッツォ先生は両手の指先を合わせたり、絡めたりしていた。

消え入るように語尾を濁す話し方も、落ち着きのない仕種も、長く伸ばした金髪も。全てがわたしを苛立たせる。

いや、わたしを責める。いや違う、先生がわたしを責めるのではない。わたしがわたしを責めている。先生を見ると、わたしがわたしを憎んでしまう。

「はい。初めての遠征でした」

「活躍したらしいね……」

「先生のご鞭撻のおかげです」

「君は、……だから」

「え？」

わたしの周りを一回りすると、パラッツォ先生はわたしに向き直った。引きつるように歪んだ唇。視線は自分のつま先に向けている。

「これから、マルケズ博士の温室へ行かないかい」

言いようのない閉塞感にわたしは息を飲む。

マルケズ博士の温室。ガラス張りの天井から差し込む日差しに鬱蒼と茂る草花、ゆらゆらと舞う蝶々。

わたしは幼い頃、自由な時間にはいつも温室にいた。パラッツォ先生も、他に仕事がないときには一緒に手入れをしていた。

先生は病的な見た目通りの、内向的で物静かな人だ。確かに変わり者ではあったが、友人のいないわたしの話をなんでも聞いてくれる、兄のような存在だった。

長く続いたアルブルグ制圧戦に救護班として初めて参戦した日にも。ツェン王族との戦いで、初めて兵士を殺してしまった日にも。わたしは先生の隣で泣いた。先生はいつも黙ってわたしの背中を撫

でてくれていた。

「今から……ですか」

そんな先生を、わたしは今。

「申し訳ありません。実は先約があります」

「そう……」

「では、遅れますので」

「待って！」

自分の心から逃げたくて、わたしはパラッツォ先生に背を向けた。それでも、彼の抑揚の強い、怯えたような声はわたしに突き刺さる。

「最近、あまり温室にいないじゃないか……」

「すみません。忙しくて」

「マルケズ博士も……淋しがってるよ」

「明日にでも、顔を出しますから」

「そう」

振り返りもせず短い返事を繰り返すわたしを、先生はどう思ったろう。

「信じてるよ……」

はかない声が、日差しの中に消え入りそうだった先生の姿に重なった。

「あの、先生！」

わたしは思わず振り向いた。しかし薄明かりが照らす長い廊下には、もう誰もいなかった。

パラッツォ先生を見失ったわたしは、すっかり重くなった足取りで城を後にした。小高い丘の上に位置するベクタ城前広場からは、町全体を一望することができる。

ずきずきと痛む胸を抱えて、わたしは広場の隅の手摺りへ歩みより、両肘をついた。むっとする生温い風が吹き、長い金髪を揺らす。

これでは気休めにもならない。わたしはため息をつき、細い髪を掻きむしる。

森と山に囲まれた首都ベクタは湿度が高く、涼しい晩でも寝苦しいほどだ。そのため城にも町にも除湿のための装置が儲けられ、一日中稼働させている。また、機械にこもる熱を発散させるため、建材も導熱性の高い特殊な金属を使っていた。しかしその建材が吐き出す蒸気が朝から晩までベクタの町を覆い、常に不気味に歪めている。そんな故郷の姿が、わたしは嫌いだ。

霧がかかったように白む空気に、機械の稼働を知らせる赤いランプがあちこちで滲む。工場区からは四六時中甲高い加工音がもれて、鼻の奥まで錆び付くような金属臭が辺りを漂っている。

くろがねの街ベクタ。

物心ついた頃から、わたしはここで生活していた。夏は煮え湯に溺れ、冬には末端から染み入るように凍りつく。ぐずぐずと水っ

ばい煉瓦置にうずくまり、わたしたちは年中そんな妄想に取り付かれていた。身を守るのはしみだらけのボロと二つの瞳だけ。たったそれだけで、わたしは自分を守らなければならなかった。

たくさんの子供たちが、常に回りを見渡していた。互いに互いを牽制しあい、獲物を探していたのだ。

何も知らない旅人や、泥酔した大人たち、力の弱そうな女子供。

そうした人々を襲い、奪えるものは全て奪う。一人で手に負えそうにない相手なら、孤児同士団結して襲った。そしてその後、盗んだものをさらに仲間同士で奪い合う。それだけがわたしたちの生き残る道であり、わたしたちの生き甲斐だった。

- - そう言い訳しながら他人を傷つける。

そんな日々に、わたしは疲れていた。わたしは昔から他の子供より体も大きく頑丈で、奪い合いに負けることなどほとんどなかった。だが、奪われた彼らの燃えるような憎しみの目。それが、わたしの氷のように冷たい青い目を溶かしてしまった。わたしは武器を奪われ、戦意を喪失した。

だから、ある日全てをやめてしまった。食えること、傷つけること、生きること。全部放棄して、わたしは路肩で大の字になり一日中寝転がることを選んだ。

その日の夜。蒸気に汚された群青の空に、大きな月が出ていた。それを眺めていると悔しくて、引きずり下ろしてやりたいと願ったんだ。

わたしなんかを、照らしてくれるな。こうして空を眺めながら、

自分より幼い孤児を襲って食料を奪う妄想を繰り返している。こんな醜い姿を明かりに晒さないでくれ。光から自分を守りたくても、両手を引き寄せる体力さえもつない。

勘弁して、誰か、殺して。

そう思いはじめた頃。辺りは急に騒がしくなった。砂利を踏み碎きながら近づく車輪の音や、子供たちの悲鳴。

警察だ。

わたしはぼんやり考えた。このままここで寝ていれば、間違いなく死ねる。どうやらガストラ皇帝も、ついに強盗孤児に見切りをつけたらしい。

以前は哀れな子供と見て見ぬふりをしていたが、ようやく駆除する決意ができたのだらう。ちょうど、わたしも死ぬ気になったところだ。ありがたい。

ただ、次また人生があるのなら。誰も傷つけない人になりたい。そして駆逐されない、必要とされる人になりたい。

憎しみの炎のような目はもう嫌だ……。

「ここにもいたぞー！」

視界が急に白く染まって、わたしは目を閉じた。警察のサーチライトだ。複数の足音がばたばたとやって来て、誰かがわたしの肩を揺する。

「君、しっかりしろ！ 意識はあるのか？」

「どっちだっついていいだろ」

「よかった、生きてるぞ！」

良いわけ、ないだろう。

びつくりして目を開けると、同時に軽々抱き上げられた。

目の前にあったのは、見たこともない大人の角張った顎。

「まだ乗れるか？」

「いや、一度研究所へ戻ろう」

「そうだな。商業区だけでもこんなにいるだなんて……」

当事のわたしには何が起こっているのかなんて分からなかった。

ただ、似たような孤児が詰め込まれた荷台に乗せられて、握り飯と水筒を一つもらったことは覚えている。そしてそれを腹へ流し込み終わる頃には、遠巻きにしか見たことのない、工業区的最奥へ連れ込まれていたのだ。

薄ら寒く、溺れるほど湿っぽい霧の中。おぼろな月光に浮かび上がったのは、白く輝く巨大な施設。円柱状の建物の回りに背の低いビルが隣接し、いくつかの渡り廊下で互いに繋がっている。

銀にオリハルコンを配合し、古に失われた力ある言葉をびつしりと彫り込んだ知識の神殿。神秘の牢獄。

それが、ガストラ帝国が世界に誇る、最先端にして唯一無二の魔導研究所だった。

「シエール將軍殿」

回想を遮った声に、わたしははっとため息をつく。気づけば手摺りについた両手を強く握りしめ、小さく震えていた。

魔導研究所。

冷や汗まみれの寝具のようにつたりと張り付いた、鮮やかで優しい、悪夢。パラッツォ先生のポピーのような上目遣い、アネモネのように引きつった笑顔。

いや。これ以上、思い出すのはやめよう。

わたしは後ろを振り返る。低く硬い声に似つかわしい、ベージュの軍服姿の大男が立っていた。手にしたランタンに下から照らされて、浅黒い頬は骸骨のような陰を刻んでいる。

「クリストフ將軍。迎えに来てくださるなんて」

「みなに急かされてな」

レオ・クリストフ將軍はそう言って、短く刈り上げた金髪を後ろに撫で付けた。その癖のせい、三十という年齢の割に額が広い。

「ご足労いただき感謝します。少し考え事をしていました」

「大魔導師さまのことか」

クリストフ將軍は太い眉を、ぐっとひそめる。皮肉げな言い草に、わたしは閉口した。

魔導師。その単語に含まれる、ざらりとした苦味――いいや、分かっているのだ。クリストフ將軍がよく思っていないのはパラッツ

オ先生だけ。だが、生粋の軍人として長く帝国に献身してきたクリストフ將軍にとって、わたしたち魔導師は快い存在ではないのだろう――そう思うたびに、わたしは自分が汚らわしく思えてならない。

誇り高く最前線で戦う軍人とは違い、わたしたち魔導師は常に後方からの援護を行う。兵士たちは相手と自分の血の温もりを噛み締めて、敵陣深くへ切り込む。そして時には自らの体やその一部と引き換えに、魔導師のためのやぐらを築くのだ。そこへわたしたち魔導師は意気揚々とやってきて、高みから魔導を振りかざす。

それでたくさんの味方の命が助かるのも事実だ。また、魔導の力を体得するのも、生半可な努力ではかなわない。

だが「魔導師」を見る兵士たちの眼差しは、羨望や称賛からは掛け離れていた。目を見れば、分かる。うつすらと細めた、コンクリートの瞳。氷なぞよりよっぽど冷たいその表情は、嘲笑。

お前は仲間ではない。ただの兵器だ。

そう言われている気がした。

だからわたしは、魔導師でありながらこのクリストフ將軍に師事した。国のため戦う兵士の一人だと認められたかった。それに、わたしは彼が羨ましかったのだ。部下に慕われ皆に必要とされている、それ故に常に凜と力強い、この巨木のような男が。

そう。

わたしはクリストフ將軍になりたかった。パラッツォ先生ではなく、気高い正義の徒であるレオ・クリストフに――。

「近頃はまた非道な実験をしたそうだ」

なのに、なぜ。

低く呟くクリストフ將軍の言葉は、これほどわたしを苦しめるのだろうか？ 將軍を憎ませるのだろうか？ まるで自分が責められているかのような息苦しさ。

「新しい魔導師の実力を量るため、五十人もの兵士を、犠牲にしたらしい」

新しい魔導師。思いもしなかった単語に、わたしは思わずクリストフ將軍へ歩み寄った。

「また魔導師を……？ パラッツォ先生が？」

「ああ。聞いていなかったのか？」

知らなかった。当たり前と言えば当たり前だ。將軍の肩書はついているものの、所詮は戦争の道具でしかないわたしに、魔導研究所の成果を聞かせる必要などないのだから。

しかし、今頃になってなぜ？ だってパラッツォ先生は……。

パラッツォ先生は、以前、あんなに沢山いた孤児を投入して、大勢の魔導師を育成して……。

……わたし以外の魔導師は、みな、いなくなってしまったのに。

立ちくらみのように、目の前が白らんで行く。ああ。温室のガラス窓に降り注ぐ真昼の日差しに包まれたような錯覚。その光の中に立ち尽くすパラッツォ先生。色鮮やかなローブの柄。黒ずんだ唇は

咲く前に萎れた蕾のようにすばまって、細く長い枯れ枝のような指が添えられた。

『秘密だよ、セリス……』

見開かれた瞳だけがいつになく爛々と輝いて、渴いた興奮を抑えきれない様子だった――。

「五十人だぞ」

語気を強めたクリストフ將軍の声に我に帰る。今日はなぜか、昔のことばかり思い出す。

「しかしそれでも数分ともたず燃やし尽くされたようだよ。全く、ひどい話だ――っ」と

そこまで言ってしまったから、クリストフ將軍は慌てて辺りを見渡した。霧のような湿気に包まれた城前広場にはわたしたち二人以外に人影は見当たらない。だが所詮、城門横に掲げられた二つの松明とクリストフ將軍のランタンで照らせる範囲での話だ。

「まったく、大魔導師殿は頼りになるお方だ。これで我が軍も鬼に金棒」

肩をすくめて、クリストフ將軍は声のトーンを上げた。いまさらそんなおべっかを使っても仕方がない。本人も分かっているらしく、眉を寄せて苦笑いしている。そんな仕種に、思わずわたしも頬を緩ませた。

「ええ……新しい魔導師殿は優秀なようですね。わたしなんかより

ずっと」

「だが、君ほど沢山の兵に慕われはしないさ」

大きなてのひらが、肩を叩いてくれた。

「さあ、酒と部下が君を待っている。行こう薔薇の將軍」

そうだ。わたしにはもう何も恐れるものなどない。女の身でありながら最前線で剣を取るわたしを、部下は認めてくれた。沢山の兵士がわたしの軍へと志願して来る。みな、皇帝閣下が、国中がわたしを必要としているのだ。

しかしこうして名声を得るほど、称賛を受けるほど。わたしの心は冷たく奮え始める。あのよく動く小さなオリーブ色の瞳が、節くれだった長い指が、後ろ髪の手すぐそこまで迫って来るような気がする。すぐるようにわたしを呼びながら。

『セリス、美しい薔薇の名前。君にピッタリだろう……』

+++++

chapter . 2

鬱屈の苗床

終わり

+++++

chapter . 3

鮮やかな緑溢れる温室は、わたしにとって心休まる場所に違いなかった。

空洞のドーナツ型をした温室は内側の壁だけがガラス張りになっていて、そこから光が差し込んでいた。反対側の壁は青々と茂る蔦にほとんど覆われていて、床には栄養を豊富に含んだ柔らかな土が分厚く敷き詰められ、背の高い大輪から鈴なりの小花まで、至るところで咲き乱れている。

そして爽やかな風が吹けばきらきらと笑うように優しい香りを振り撒いて、そうしてわたしを迎えるのだ。同士である、わたしを。

+++++

chapter . 3

芽吹き

+++++

「おやおや！ 珍しいお客さんだ」

緑の中をふらふらと歩いていると、朗らかな声が聞こえた。そこらを見れば、中央のガラス窓からの光を背にして、クリーム色のワンピースを着た男性が笑顔で両手を広げていた。長く白い眉毛の下、こじわだらけの目元が細まると、小さな瞳がその奥で輝き、灰色の口髭の下で口角がきゅっと持ち上がる。

「セリスじゃないか」

「ご無沙汰しております、マルケズ博士」

昔はよく、この人に抱き上げてもらったものだった。だがすっかり成長した私と比べると、中肉中背の中年博士シド・デル・ノルテ・マルケズは十センチ近く背が低い。彼は足早に近づくと、抱き上げる代わりに両手を私の背中にまわし、ポンと陽気に叩いた。

「立派になって！ 活躍はレオ將軍から聞いとるよ」

「博士からいただいた力ですから。帝国のため尽力するのが当然です」

「相変わらず、くそ真面目だのう」

つまらなそうな口調で言いながら、博士は私から離れ、足元のバケツとヒシャクに屈み込む。最近急速に成長した腹部がつかえるのか、取つてを掴むのにも一苦労だ。

「戦争も結構なことだがね。もう年頃なんだから、男の一人や二人紹介して私を驚かせてほしいもんだ。あいたたたた……」

「大丈夫ですか、博士！」

「いや、腰が痛むだけだ。偉い博士ぶつても、年には敵わん」

軽口を叩きながら、博士はようやくバケツを持ち上げた。軽く曲げた膝、前のめりの腰、全身がびくびくと震えながら立つその姿には、ため息が出る。

長年研究に没頭しつづけた体は、今やペンより重いものを持てないらしい。脳みそと腹が栄養の全てを吸い取ってしまうのだろう。金と赤の刺繍で彩られた飾り袖から覗く手首は、四十代半ばという実年齢にしては枯れていた。

「ご自分で水を撒くより、水撒き機を発明される方が早そうだ」

そう言ってしまったてから私は苦笑いする。馬鹿げた発言だ。

この温室を満たす心地好い日光、適度な湿度、十分な空気の流れ。そして室内に季節さえも作り出す機械を開発したマルケズ博士が、水を撒く機械を作れないはずがない。

彼はただの一研究員ではない。ガストラ帝国一の科学者であり、魔導研究所の権威でもあるのだ。

「……なあセリス」

マルケズ博士はバケツを右手一本でなんとか持つと、左手でヒシヤク一杯の水を取り、ゆつくりとした動作で撒いた。遠心力で飛んでいく水しぶきは、人工の光を浴びて七色に輝く。

「花は水だけじゃあ育たんのさ。手間隙を掛けねば」

「しかし、博士がこの調子で水をやるのでは効率が悪い」

「効率！ 嘆かわしい、それが花の乙女が口にする言葉とは！」

「では、何を口にしましょう」

私はマルケズ博士からバケツとヒシヤクを引ったくった。正直見ていられない。年よりがやる庭仕事にしては、この温室は広すぎる。

「愛、でも語れと？」

「そうさセリス。薔薇に水がいるように、お前には愛がいるんだよ」

「薔薇には水がいりますが、兵器にはいりません」

「油がいるだろう」

……普通は、「君は兵器じゃない」とか言うものじゃないだろう

か。ヒシャクを握ったまま博士を睨みつけると、彼はしてやったりと意地の悪い笑顔を浮かべていた。

「このあまのじゃく娘め。自分を兵器だなどと、思ってもいないくせに」

「自分の評価と他人からの評価は違うものです」

「可愛くないのう、そうやって殻に閉じこもって。べっぴんさんなんだから、もう少し他人に心を開ければモテモテだろうに」

「モテモテ……」

しばらく会わない間に、博士はなんだか意地悪になった気がした。昔は、私が他の子供と同じように振る舞わないことについて触れないでいてくれたのに。

なんと答えたらいいのかわからず、私は黙って水撒きを続けた。博士もそれ以上は言ってこない。ただ両手を後ろで組んで辺りを眺めたり、伸びをしたりしていた。

博士、私には分らない。私は兵士としてしか存在価値がない。そのくらい知ってる。ただの少女だったころの私に向けられたのは、孤児仲間の憎しみや怒りの視線と、そそくさと通り過ぎる人々の無関心だけだった。

それが今はどうだ。兵士として、魔導師として、皆が私を頼ってくれる。戦いとなれば皆私の名前を呼ぶ。私が期待に応えれば、恍惚の表情と喝采が私を包む。

皆が兵士の私を喜んでくれる。なのに博士、あなただけが喜んでくれない。あなたが本当に喜んでくれたのは、ハート型のローストピアリーを作ったときだけだった。それも、長期遠征に出かけてい

る間に枯らしてしまっただけ……。

博士。私はやっぱり、あなたが望む「少女」にはなれない。皆の歓声が、羨望の眼差しが、遠のくのが怖い。またいらない子になるのは嫌だ。

- 博士だつて若い頃には、私が「強い兵士」になることを望んでいたはず。この戦乱の時代に生き残るために、戦いに勝つためにあの厳しい訓練を、実験を、私に強要したじゃないか。おかげで私は強くなった。

なのにそれを今になって否定するなんて。あんまりずるい。

辺りに生い茂る緑が滲んで、人工の光との境目が消える。私は泣くのだろうか？ 子供の頃のようにみつともなく。

目を擦ろうかと思った。でも博士は私を見ているかもしれない。泣いているのかとそう聞かれるのがたまらなく嫌で、私は込み上げてくる涙と戦いながら、平静を装って水撒きを続ける。

その時。温室の扉が開く音がした。

「ケフカ……」

博士がそう、呟いた。

体中が凍りついて言うことをきかない。パラッツォ先生には先日でも失礼な態度を取ったばかりだ。まずは謝らなくては。そう思ったからこそここに來たのだ。出来れば二度と足を踏み入れたくないと願っていた魔導研究所の屋上にある、この温室へ。

だけど一抹の不安が私を怯えさせた。あの夜、先生と別れた後のクリストフ將軍との会話。もし聞かれていたとしたら？ 誰かが聞き付けて告げ口していたら？

パラッツォ先生は物静かだが激しい一面もある方だ。例え私であっても、思い通りにいかないと分かればどうなるか分からない――。

「ご機嫌よう、シド博士。それに……セリス」

ねつとりと絡み付くような声。まだ姿を見てもいないのに、私には分かる。あの落ち窪んだ目が、その中に浮いた小さな翡翠の瞳が、じいっと私を捕らえているのが。

芝生を踏む音が近づいてくる。

「……来ないんじゃないかと思ってたよ……偉いじゃないか」

すぐ真後ろに。先生が立ち止まった。

謝らなくては。だけど顔を見るのが怖い。べったりと脳裏に焼き付いている、あの日の先生の表情、そこに満ちる熱帯夜のような狂気の色があつたらどうしよう？

あの日先生は言った。『秘密だよ、セリス』薄い唇をにいつと吊り上げ震える長い指をそつと沿えた、あの日。『アレやったの、ぼくちなんだ……』

他の魔導実験の被験者を全員殺したのは、自分だと言ったあの日の表情……！

「まあいいさ……。今日は紹介したい子がいるんだ。こっち、向い

てくれないか……」

先生は急に声のトーンを変えた。相変わらずぼそぼそと掠れた話し方だが、そこには食虫花の粘膜のような感覚はない。

どつと、背中に汗が流れた。今はまだ大丈夫。

バケツとヒシャクを下ろしながら、私は静かに息を吸った。

とりあえず今は普通にしていよう。先生は何かしでかそうという様子でもないし、ここにはマルケズ博士もいる。大丈夫、何も起くるはずがない。

言い聞かせてから私は振り返った。そして目を奪われた。パラッツオ先生の隣に立つ、不思議な少年に。

その姿は、華奢な体に子供用の軍服を纏ったただの少年兵に過ぎない。だがそれだけではない、圧倒的な雰囲気を持ち合わせていたのだ。

癖のある長い髪は砂漠の焼けた大地に似た、くすんだ砂色。前髪を抑えるためか、頭部に丸い飾り輪をはめている。瞳は大きく、秘境の滝壺にむす柔らかなもえぎのよう。明るい色ではあるがその透明感には、落ちてしまいそうな危うさがある。肌は透明でシワ一つなく、線の細さは女性とみまごうばかりだ。なのにどうしてか少年からは古びた威厳のようなものを感じる。

例えるならそう、今ではとうに伝説となったいにしえの竜のような。

彼は私を目の前にして、眉一つ動かさなかった。これまで、そんな人間はこの帝国軍には一人もいなかったのに。

「君の先輩のセリスだ……」

パラッツォ先生の声に、一応私は軽く会釈をした。私は少年から目が離せない。彼もそんな私をじっと見つめている。

「薔薇の名前から取ったんだ……名前通りの美しさだろう？」

「はい、ケフカ様」

短い返答は囁きのようだったが甲高く、彼の若さが伺える。

――だがなにかがおかしい。

見たところ、十五、六の少年だ。それが私やパラッツォ先生、マルケズ博士に囲まれて、まるで怖じけづく様子もない。

と考えて、すぐに私は思い出した。私も十七だった。有り得ない話でもないか。しかしそう考えると、急にこの美しい少年が身近なもののように感じられて、なんだか嬉しくなってきた。

「お会いできて光栄です、セリス様」

「私もだ。それで、君の名前は」

握手しようと手を伸ばす。それを掴んだのはパラッツォ先生だった。

びつくりして先生を見る。彼はまた、ぞくりとするような恐ろしい顔をしていた。眉を吊り上げ、目玉がこぼれそうなほどに刮目し、それでも口元には笑みを貼付けている。

そして黙っているテラの代わりに、先生が囁いた。

「テラだ……」

テラ。古い言葉で、意味は「大地に眠る魔物」。

五十人の兵士を焼き尽くすのに、数分とかからなかった――。

クリストフ將軍の言葉が蘇る。そうだ、新しい魔導師。それがこのテラ。私とそう歳も変わらないのに、そんなにひどい訓練を受けたのか。

パラッツォ先生がゆっくり手を離す。触れるな、という警告のもりだったのだろう。自由になった手をテラに差し出すことはやめた。

だけど、私は。

「テラ。見たところ私たちは歳も近そうだ。それに同じ魔導師どうしだし……」

嫌に饒舌になっていた。そのくせ、黙って私を見返してくるテラがあまりにも無表情なので、恥ずかしいほど焦れて口ごもってしまう。でもここまで言ってしまったものを飲み込んで仕方がない。

私はおずおずと先を続けた。

「その……仲良く、してほしい」

こんな言葉を口にするのは初めてだ。頬が強張り、かあつと熱くなる。なのにテラはただ人形のように、私を見上げるばかり。

「……テラ、行こうか」

パラッツォ先生が困ったように言っ、テラの肩を叩く。すると彼は顔だけを先生に向け、はいと頷いた。私には目もくれずに。

「この子は『塔』にいるから……いつでも会いに行くといいよ」

先生はそう言い残して、テラと共に温室を去っていった。何度も私を振り返りながら。

その姿が扉の向こうに消えてから、マルケズ博士が突然咳ばらいした。

「セリス・シエール將軍。一つ進言させていただいてもいいですか
な？」

そういう慇懃な態度は、私をからかいたい証拠だ。きっとテラとの会話を深読みしているに違いない。あれを会話と呼べるかどうかは置いておくとして――私はとっさに弁明を考えた。

真っ先に思い付いたのはこれだ。私が同年代の友人を欲しがるのは変ですか？ それに――。

「テラは女の子だよ」

――何と取り繕おうか、そればかりに一生懸命だったので。私の頭が博士の言葉を受け止めるには、一瞬の時間がかかった。

「おんな……？」

しかし反射的に単語を反芻し、理解する。華奢な体に中性的な顔立ち。男子用の軍服をまとっていたため勘違いしてしまったが、あれはどう見たって、少女のものではないか！

「いやぁ残念だよ。セリス將軍がせっかく恋に目覚めたと思ったら、相手がテラとはなぁ」

「うっ……美しい少女でしたね」

動揺を取り繕おうとしたせいか、どもってしまった。盗むように博士を見ると、彼は満足そうな笑みを浮かべている。

「何か可笑しいですか？」

「いや別に。ただ、君が人間を『美しい』と言っのを初めて聞いたと思ってね」

そう言ってから、博士はふと笑顔を曇らせた。

「……いや、テラは人ではないのだった」

「え？」

不意に先ほどよぎった竜のイメージが思い出される。馬鹿な。テラは間違いなく人の形をしていた。

「後で戸惑わせたくないから言うが」

前置きしてから、マルケズ博士は一呼吸置いた。

「テラは幻獣だ」

幻獣。それはかつてこの大地を覆った強大な支配者だった。空間を漂う様々の要素を操る力を持ち、彼らはそれを魔法と呼んだ。

しかし大きな力はやがて争いを産む。彼らの戦いは山を砕き空を裂き、海を毒した。それでも幻獣たちは互いに覇権を競うことをやめず、戦争はやがて力を持たない人間をも巻き込むこととなる。絶対数の少ない幻獣は、数では圧倒的に勝る人間に魔法の力を与え、自分たちのために戦わせたのだ。

不毛な暴力だけが大地と時間を支配した。もはや勝敗が決するより、世界が滅ぶ方が早いと誰の目にも明らかだったという。だからなのだろう。

幻獣たちはある日突然、姿を消した。歴史書では、世界のどこかに結界を張り自らの力を封印したとされているが、真相は分からない。

とにかく、千年前に世界を破壊しつくした魔大戦はあまりにも呆気なく唐突に終結し、後には荒れ果てた大地と人間だけが残された。そして歴史はその後、機械による世界の復興と魔法を授けられた人々の迫害へと進んでいく。

多くの人はこの戦争をお伽話の類と見ている。現代では魔法の力を持つ人間などいないし、幻獣が隠れたとされる場所も見つかっていないからだろう。ただ我々帝国兵は知っている。

幻獣は確かにいた。そして我々の大陸の東側で、今もひっそりと生きているのだ。

ガストラ皇帝率いる遠征部隊がそのうちの数体を捕らえて以来、我が帝国では研究が続けられてきた。幻獣の力を応用し、人間の生活をより良くするための研究。

私やパラッツォ先生の『魔導』の力もその一環だ。マルケズ博士の長年の研究の成果。

幻獣から抽出した魔力を体内に埋め込むことで得た力なのだ。

私の体に住む、力の源である幻獣そのものであるというテラ。彼女に対して申し訳なく感じはした。私はいわば、彼女の同族を食べたも同じなのだから。彼女はさぞ、私が憎いだろう。そう考えると温室での態度は納得だ。私が彼女に好かれるはずもない。

城内の自室でベッドに横になったまま、私はじつと天井を見つめていた。もう消灯時間もとくに過ぎた夜半。テラスからは霧でばやけた月光が優しく室内へ入り込んで辺りを柔らかく照らしている。

いつもならぐっすりと眠っている時間だ。なのに今日は、いくら寝返りを打つても目をつむっても眠気がやって来ない。

理由はもちろんテラだ。少女であると分かって、私は余計に彼女を知りたいと思った。確かに彼女は幻獣かもしれない。でも同じ女性であり魔導研究所の被験者であり、そして同じように、幼い身で戦場に繰り出さなければならぬ同士なのだ。テラは恐らく、誰より私に近い存在なんだ。

なのに彼女は私を嫌っているかもしれない――ベッドに入ってからというもの、ずっとこの堂々巡りだ！

私は飛び起きた。ナイトテーブルの上の置き時計は遅々として進まない。朝はまだ来ない。

明日になったら、また会いに行こうと決めていた。日を改めれば何か変わるかもしれないから。明日まで待とうとそう決めた。自分で決めたことなのに――。

そんなことも守れないほど、私は彼女に期待していた。だってこれまで、私の同士と言ったら温室の草花だけだった。人工的に与えられた環境なしには生きていけない私たち。周囲の視線を伺ながら、人間に利用されるだけの存在。

草花は言葉もなく揺れているだけ。だけどテラ、あなたと私は励まし合うことができる。慰め合うことができる。ああ、私はどれだけ長い間、そんな相手を探していたのだろう！

着慣れた服をまとうのさえもどかしい。それでもきちんと着替えてから、私は部屋を飛び出した。

城から工業区的最奥にある魔導研究所までは、普通に歩けば小一時間といったところだ。だけど今日は気がはやっただけか、随分早く着いた気がする。

研究所の敷地内、本棟から少し離れた場所に『塔』は建っている。細長い円柱型で、縦に四つ、小さな窓がついている。研究棟同様真っ白な壁の表面には魔法の言葉が彫り込まれていて、その文字は被験者に目覚めるであろう大きな力を弱める役割を持っているという。塔の後には背の高い林が生い茂り、まるで建物を飲み込もうとしているように見えた。

塔は、魔導研究の被験者たちが寝泊まりする寮のようなものだ。以前は私もこの最上階の部屋にいた。私以外の被験者たちも。

- 拭つても拭つても顎先からしたたる汗は、熱帯夜を歩いてきたせいだけではない。私はいまだにこの場所を恐れている。

だけどそれでも、私はテラに会いたい。

意を決して、私は塔へと入っていった。

消灯後の塔の中で目に見えるのは、窓から入る月明かりだけだった。それでも昔なじみの場所だけあって、私は迷うことも躓くこともなく塔を登っていった。いや躓くはずがない。テラ以外に使う人間がいらないからだろう、通過した階の部屋は全てもぬけの殻、ただ床に降り積もった埃だけが、青白い光に照らされていた。

そしてたどり着いた最上階に、テラはいた。部屋の中央、小さな窓に背を向ける形で、背もたれの高い椅子に腰を下ろしている。逆光にくつきりと浮き上がるシルエツトでそれが分かった。

「テラ……？ 起きてるか？」

少し迷ってから、私は声をかけた。突然の、こんな時間の訪問だ。よく考えれば迷惑以外の何物でもない。

真っ黒な影はぴくりとも動かない。やはり寝ているのだらう。私

だって訓練時代には毎晩くたびれきって泥のように眠っていた。これは当たり前前の展開じゃないか。

収まりきれない息をつきながら、私は悩んだ。

いや悩むこともない。彼女は眠っている。私は黙って塔を出て、城に戻る。それしかない。だが年頃の女の子の部屋へ無断で入り、謝罪もなしに立ち去り何食わぬ顔でいるというのも妙だ。勝手に訪ねたことを謝罪する手紙を残せばいいのだが、何せこの暗さで紙とペンを探すのは難しい。

などと考える振りをしながら、きつと私は待っていたのだ。テラが起きて、私に気づいてくれるのを。

――そんなずるい気持ちでいたから、だから罰があたったんだ。

「来ると思ったよ……」

暗闇から突然聞こえたのは、パラッツォ先生の声。

私は驚いて、ひっと息を呑んだ。

「気づかなかったかなあ……暗いからねえ」

くつくつ、喉を引き攣らせるように先生は笑う。それから急に、暗い部屋の中央にテラの真っ白な顔が浮かび上がった。長いまつげ、線の細い華奢な鼻筋。桜の花びらのような小さな唇。彼女の周りの闇を押しつけたのは、先生が魔導で作った球体状の光だった。

有り得ない。この室内では、魔導の力は極端に弱められる。だといつのに光はどんどん強くなり、室内はまるで昼のように明るくな

った。

部屋には、テラが腰掛けている椅子しかなかった。その隣で、パラッツォ先生はひじ掛けに片膝を乗せてテラを覗き込んでいる。

「パラッツォ先生？」

「美しいだろう、セリス……テラはこんなに美しい」

言いながら、長く伸びた爪でテラの頬をなぞる。彼女はよほど深く眠っているのか、身じろぎ一つしない。

なんだ？ この状況は。心臓が急に早鐘を打つ。眠る少女の部屋に、私と先生。テラが起きてしまったらどうしよう？ 何と言う？ 何を言われるだろう？

心配なことはたくさんあった。だけどそれを全部吹き飛ばしてしまっ強い嫌悪感が私を襲った。テラの頬に赤く、パラッツォ先生の爪痕が残る。額にかかる前髪が、先生の息で揺れる。それがなんだか汚らわしいようであまらない。

テラに触らないでください。そう言ってしまいたかった。

「妬ましいだろう？」

「え？」

テラを見つめたまま、先生はこんなことを言い出した。

「テラの美しさ……嫉妬するだろう。だから昼、君はあんなに慌ててあんなこと言ったんだ……早いとこテラに取り入って先輩風吹かせてればさ、対面上の優位は保てるからね……」

意味が分からない。

昼間私が言ったこと？ 仲良くしてほしいと言ったことだろうか？ それを先生はこんなふうにとったのか。さすがに私は黙っていられなくなつた。

「私はそんなつもりでは・・・」

「嘘だ。セリス、君が馬鹿じゃないのは、僕がよく知ってる」

先生はようやく顔を上げて私を見据えた。思わず気後れしてしまふ、異様なほどに小さな瞳で。

「考えてみなよ……」

そしてにいと、唇の片端を吊り上げて笑う。

「テラは幻獣なんだよ？ 魔法が使えるんだ。マルケズ博士の作り出したまがい物の『魔導』なんかじゃなく、本物の魔法がね。戦場じゃ君の百倍以上の戦力になる。その上君に劣らないこの美貌だ。帝国軍での君の人気も危ういと思わないかい？」

ずきんと音が鳴つた。

そうだ。なぜ私は気づかなかつたのだろう。私が今、常勝將軍だの青い薔薇だのともてはやされているのは、私が魔導という専売特許を持っているからに他ならない。もしテラが私の隣に並んだなら？ きつと私など霞んでしまう。今まで私に向けられた称賛は全て、彼女のものになってしまう。

「一つの花壇に薔薇は一株あればいい。そうだろ、セリス」

私の狼狽ぶりを少しでも見逃したくないのだろう。先生はテラの椅子から離れ、私に歩み寄った。

「また。私が間引いてあげてもいいんだよ？」

先生がすぐ目の前まできても、私は動けなかった。きちんと間引いてあげないと、花は美しく咲かない。だから先生はあの日の夜遅く、この塔へやってきて、私以外の被験者を下の階へ集めた。

私を大花にするために。

「テラは確かに貴重な私のお人形だ。ただどねえ……惜しくはないよ？　美しいセリス……」

珍しく口数が増えていた先生が、急に言いよどんだ。見ると、黒ずんだ唇が微かに震えている。

先生は続きを口にする前に、私の肩に手を置いた。

「君が、もし、私のものになるなら……」

氷が頭から胃にかけてを貫くような、そんな冷たい衝撃が走った。

気づけば私は先生の手を打ち払い、後ずさっていた。あと一歩下がっていたら階段を転がり落ちていたところだ。いや、いつそ落ちておけばよかった。首でも折って死んでしまえばよかった。

払われた手を押さえて私を見上げる先生の目。そこには痛いほどの困惑と疑問があった。悲しいほど、私を信頼しているのだろう。

でももう我慢できない。私はこれから、先生を裏切る。

もちろん、先生にはとてもお世話になった。まだ被験者の一人であつた頃には、突然与えられた大きな力を制御できず、何度も自分を殺しかけた。その度先生は身を呈して助けてくれた。魔導師の先輩として、たくさんのことを教えてくれた。幼い頃は、本当に兄のように慕っていた。

だけど他の被験者を殺したあの夜からずっと、私はあなたが恐ろしかった！

「あなたは、毒だ……！」

震える声でそう言った。喉が渴いて引き攣り、うまく話すことができない。ただまっすぐに先生の困惑を見据えて、溺れた人のように喘ぎながら続けた。

「私は、自分の名声のために誰かを殺したいなんて、思ったことはありません……まして嫉妬など……！ 私はただ国の理想に尽くすのみ……、先生、私はあなたのような考え方は、嫌いだ」

先生はぴくりともせず、じっと私を見つめ返していた。表情は凍りついて変わらない。絶望的なほど目を見開いて、半開きの唇は言葉を失っている。

そんなパラッツォ先生に、私は駄目押しの一撃を加えた。

「あなたは醜い！」

捨て台詞を吐いた私は、まさに脱兎のごとく塔を飛び出し、城へ逃げ帰った。帰路では一度も後ろを振り返らなかった。

私は最低だ。

一方的に先生を非難し、先生の意見も聞かずに逃げた。間違いく先生を傷つけたし、怒らせてしまった。なのにそんな先生の所にテラを置き去りにした。

理由は簡単だ。先生の毒に負けてしまいそうだったから。

そうだ、先生は正しい。私はテラに立場を取られるのが怖い。国のために戦うなどという御託は所詮借り物だ。平等な世界、弱い人々に手を差し延べる帝国の理想に骨身を砕く――クリストフ將軍の人氣を羨んで真似てみただけ。

本当の私の動機は違う。必要とされたい、それだけだ。テラのせいでそれさえ叶わなくなってしまうなら。

テラなんかいない方がいい。

自分がそう考えてしまうことさえパラッツォ先生のせいにしてしまおうとする。狡い自分自身の醜さが恐ろしい。

やっぱり階段から落ちていればよかった。いつそ先生が逆上して私を間引いてくれればよかったのに。そんなことを考えながら、私は眠れない夜を泣き明かした。

+++++

chapter 3

芽吹き

終わり

+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8191q/>

手を伸ばす、花びらを振り払って

2011年11月13日21時43分発行